

自蹊庵便り

令和五年 長月

NO 164

茶事折々

炎天下での湿し灰そして朝茶

今夏は誠に酷暑続きにて、世界のあちこちで被害甚大にございます。

日本にあっても多くの気象災害があります。自蹊庵には九州から御参加の皆様も多く毎年の災害に心が痛みます。

温暖化の深刻さも増すばかりにて、そのような最中、今年も恒例の示し灰作り、無事に終わり、ホツとしております。

テレビのニュースでも熱中症の人が続出している折、今年はやめようかしら：と、一瞬心怯む思いにございましたが、先ずは無理をせず、十分に水分補給、首廻りの冷却工夫などしつつ、土用の真っ只中、八月二日に無事、三十キロほどの湿し灰を作ることができました。

偏に会員の皆様の御協力の賜物にございます。しっとりとした光沢のある黒々とした湿し灰が出来上がりました。炉開きも楽

しみなことにございます。

昔を今に再現する試み、茶の湯の世界にあつては一時が万事、季の移ろいの今を掬い取る作業であつてみれば、年々景色のむずかしきことの手感もしております。

さりながら、今には今にあつた智慧を持ちながら、茶の湯の本質に添ったあり方の工夫の必要も感じつつこの頃でございます。

一年が早いですね。九月の重陽、十月の名残り、十一月の口切り、十二月の夜咄と、常、有り合わせの道具ながら、心精進と云うものと正比例して、同じ棗でも茶入でも趣向によつて違った顔に見えるほどの空気を作れるほどになりたいものと憧れます。

実情は心乏しく、齡重ね、早々と走り抜け、なかなかのことにございます。

八十路に入りて、わが拙さに責任の重さを噛みしめつつの日々ではございます

が、迷うことなく思うところをやり続けてみる、そのみの起き伏しにございます。

その先に何があるのか、何を見させてもらえるのかは判らねど、きっとその先に見えるてくるものは、陰陽の先にある自在の境地とでもいまいましようか、辿り着く処はそんなところではないかと：？そんな予感する今日この頃でございます。

炎天下での湿し灰、早朝三時起きの日間の朝茶も無事に終へ、朝茶にては近くの阿弥陀寺まで名水を汲みに行つての名水点、誠に柔らかく美味な一服にございました。

湿し灰、朝茶共々、御参加の皆様の惜しみない御協力あつてのことでございます。今夏も無事終えましたこと深く感謝申し上げます。

読者の皆様の御要望にお答えして、今号より読んで得する頁のコーナーを復活させます。以前にもシリーズで載せました日々の陰陽の卦と料理技術一例ずつ載せてまいります。

質問やリクエストにお応えできるよう、稔りあるものにしてまいります。

読者の皆様と共に！



読んで得するおまけの頁

料理の技法

○里芋の柔煮（白煮）

里芋米とぎ汁で下茹でてからが一般的ですが、里芋の旨味をより引き出す方法を紹介します。

里芋は六面に剥き、明礬水に十分ほど浸し、水で良く洗い、灰汁止め作業をしておきます。直炊き、蒸し煮のときに出汁をとった削り節を上手に利用しましょう。

直炊きの場合には、鍋に削り節を入れたガーゼを敷き（リードでも良い）、里芋

をのせ、リードを被せ、更に削り節の出汁をのせます。たっぷりの出汁加えて炊きます。

出汁をとった後の削り節を敷くことで落とし蓋の役目を果たし、煮崩れを防ぎます。蒸し煮の場合もボールにセットして蒸します。

里芋の美味しくなる時期到来です。是非お試しを、出汁は薄八方または淡口などで、走りの頃は白煮がいいですね。

○九月の卦



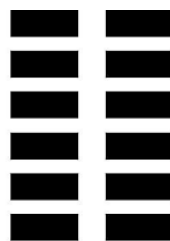
山地剝
さんちはく

九月の卦は、「山地剝」で、上卦が地となっており、陽がたった一つ残った状態であります。昼がどんどん短くなり、気温の低下も著しく、どんどん陰が勝つてくる時期に当たります。

但し、上卦に一つだけ残る陽は昔から実りをもたらす果実とされています。これがその後に地に落ち、種子を大地に

まいてくれることを意味します。一方、九月の九は陽数の極数であります。最も位の高い陽数ですから、その意味では九月は良い月とされます。人事などにおいては実りを得られる月ともされています。

○十月の卦



坤為地
(こんいち)

十月の卦は、「坤為地」で上卦も下卦もすべて陰の状態になります。

陽の気がまったく全陰の月ということになります。陽を「天」または「神」に置き換えますと、全陰は神不在を意味することになります。「神無月」の名称が陰陽の概念に基づいていることが良く判ります。この神様のいない全陰の月は気候的には、どんどん日差しが弱くなり、気温が低下していきます。

もの皆衰え、勢いというものがなくなってきた月ですが、この次の十一月には陽が表れ、どんどん勢いが出てくる月とされています。一陽来復ですね！来たるべき良い時期を前にじっと我慢の月ともいえます。